

満鉄留魂祭参加記

湯川真樹江

はじめに

「満洲の記憶」研究会では、これまで十数回満鉄会での史料調査を行ってきた。2015年5月、筆者は天野博之専務理事のご厚意により、最後の満鉄留魂祭に参加した。そこで本稿では満鉄会の活動と留魂碑の建立経緯を説明し、留魂祭の状況を報告する。

1 満鉄会の活動

まずは満鉄会について簡単に述べたい。満鉄会の前身は満鉄社友新生会で、満洲より引揚げてきた南満洲鉄道株式会社（以下、満鉄と略称）の旧社員らによって1946年に結成された。当初は旧社員および家族の更生や残留社員の引揚げ促進などを目的に活動しており、帰還した人々の把握が進んでからは、名簿（氏名、居住地、旧職名など）が作成されるようになった。1954年には財団法人満鉄会の設置が認可され、満鉄社友新生会は満鉄会とその名を変更した。また旧社員であった安井謙や永末英一らが国会議員に当選すると、旧満鉄社員の債権確保や米国会議会図書館所蔵の満鉄資料返還交渉が進展した。満鉄会ではそのほかにも旧重役社員の葬儀や会員バッジの記念品配布などの文化活動を主催し、日中国交回復以

降は大連や瀋陽などを訪問するツアーも開催するようになった。

2 満鉄留魂碑の建立経緯

満鉄留魂碑が建立されたのは、旧満鉄社員の戦後補償業務がひと段落した頃である。1979年3月に大阪満鉄会会長の小味淵肇は「満鉄社員顕彰碑」の建立を提案し、その後、理事会によって可決された。満鉄会は佐藤晴雄理事長らをメンバーに建築小委員会を結成し建立候補地の視察を進めたが、その中で有力な候補地となったのは、下関にある大連神社（赤間神宮境内）であった。大連神社は戦前に大連にあり、戦後の混乱期に水野久直宮司がご神体を持って帰還したという経緯を有していた。また下関は満洲につながる玄関口でもあった。そのため、建立地の選定は比較的順調に進んでいったようである。当初、水野宮司も積極的な姿勢を見せていたが、留魂碑のデザインをめぐる意見の衝突が起きたために、大連神社での建立案は白紙となった。決裂後、建築小委員会では富士山麓の富士霊園と比叡山の夢見ヶ丘を候補地に挙げていたが、富士霊園は安井謙（当時は参議院議長を退任後）らの関係する財団法人であったことと、多くの旧満鉄社員が眠

っていたことによりこの地に決められた。

富士霊園では建築に制限が加えられていたために、建築小委員会は新たにデザインを練り直した。留魂碑デザインは幾多の変遷がみられたが、結果的には①富士霊園の「清らかな環境」を維持し、②石碑は「五つの石の魂を一体」にしなごら「大満鉄の多種多様な仕事の部門が体的」となごて強い躍動感を表し、③周辺にはベンチを備え付け、人と魂、魂と魂の「対話の場」を設けること等が決められた⁽¹⁾。

1982年4月14日には竣工式が明治神宮司祭のもとに行われ、900余名もの人々が参加した。満鉄留魂碑は55団体約8080名からの寄付金（約8900万円）によって建立され、格納庫には社員録（漢人、朝鮮人等を含む）、殉職社員芳名簿、満鉄社旗などが収められた。そして満鉄留魂祭は毎年5月に開催されることとなった。

3 最後の満鉄留魂祭

前述の通り筆者が参加したのは最後の満鉄留魂祭（第35回）である。満鉄会が2016年3月に解散されるに伴い、最後の式典となった。当日は五月晴れの清々しい天候で、新緑の美しい景観が目を引いた（写真1）。午前11時30分に富士霊園事務所に集合の後、留魂碑前まで移動した。式典プログラムは以下の通りである（カッコ内は担当した人物）。



写真1 満鉄留魂碑

撮影日：2015年5月15日

撮影者：湯川真樹江



写真2 直会の様子

撮影日：2015年5月15日

撮影者：湯川真樹江

11：45 式典開始

開始挨拶・司会（天野博之専務理事）

11：50 物故社員および関係者に黙禱

11：55 祭詞奏上（松岡満壽男理事長）

12：00 「満鉄社歌」斉唱

12：10 献花・写真撮影

12：30 「北はアムール」斉唱

留魂祭のはじめには、天野専務理事が式典の始まりを告げ、物故社員および関係者に黙祷した。その後、松岡理事長による祭詞が奏上され、「満鉄社歌」を斉唱した。参加者は一人ずつ主碑の前に向かい白菊を手向け、記念撮影を行った。当日の参加者リストをみると、一世は16名、その子供である二世は17名、三世およびその他関係者は10名であった。参加者の顔触れを見ると80代が中心で、会員の高齢化を実感した。参加者の多くが二世やその他関係者で、彼らのほとんどは満洲で幼少期を過ごしていたために「満鉄社歌」、「北はアムール」等の歌を知っている人は多くなかった。同様に、若い世代がかつて大連神社敷地内での留魂碑建立計画があったことを知る人も少ないと思われた。

式典の後、富士霊園事務所にて直会が開催された。直会では和風御膳が供えられ、参加者は各自付近の参加者と談笑した(写真2)。筆者は二世会員のそばに着席したが、そこでの会話は出身地や卒業した小学校の話題が中心であった。お互いに初対面の人が多く、それぞれ満洲とのつながりを話していた。会の最後には再び「北はアムール」を斉唱し、お土産として松岡洋右の書と饅頭が手渡された⁽²⁾。直会はなごやかな雰囲気うちに終了した。

結びにかえて

筆者は満鉄留魂祭に参加して、旧満鉄社員の間で共有されていた経験が、二世、三世と世代が下っていくにつれて薄まっていたことを実感した。満鉄留魂碑関係史料や『満鉄会報』には一世会員の満鉄への思いが強く現れており、幾多の衝突が生じたことも納得できる。二世、三世の満鉄に対する思いは一世のそれとはやや異なり、独自の価値観を有しているようにみえた。全体として若者の数は少なく、彼らの中で満鉄アイデンティティを体感的に共有することが難しかったことが、戦後70年を経て満鉄会が解散する一つの契機になったと思われる。会の解散は筆者も一抹の寂しさを覚えるが、満鉄会が各時期に行ってきた活動を記憶にとどめ、今後も調査と分析をしていく予定である。史料の提供および留魂祭への参加を許可してくださった天野専務理事にはこの場を借りてお礼申し上げたい。

(1) 財団法人満鉄会『満鉄会報』141号、1982年5月31日、3頁。

(2) 松岡洋右の書は吉田松陰の「至誠の書」に因んで、「至誠亦不動者未之有也」と記された(複製)。